広島大学総合博物館研究報告 Bulletin of the Hiroshima University Museum 2: 1-8, December, 25, 2010

論文 Article

保護活動支援を目的とした野鳥観察ツアーの評価と課題
― 広島県内でのブッポウソウとカンムリウミスズメ観察ツアーを事例として ―

浅野敏久[1]・飯田知彦[2]・光武昌作[3]・榎本隆明[3]・林健児郎[3]

Lessons learned from Evaluation of an Eco-tour Designed to Support the Conservation Works for Wild Birds: A Case Study of Dollarbird *Eurystomus orientalis* (Buppousou) and Japanese Murrelet *Synthliboramphus wumizusume* (Kanmuriumisuzume) Watching Tour in Hiroshima Prefecture

Toshihisa ASANO[1], Tomohiko IIDA[2], Shosaku MITSUTAKE[3], Takaaki ENOMOTO[3] and Kenjiro HAYASHI[3]

要旨：ブッポウソウとカンムリウミスズメの保護活動を支援する環境事業として野鳥観察を中心としたエコツアーが広島県内で行われている。本稿では，広島市民を対象としたWEBアンケート調査と，ツアー参加者を対象とした，参加動機や評価に関するアンケート調査の結果を報告する。前者からは，鳥の知名度の低さにもかかわらず，1/4程度の回答者がツアーへの関心を示すとともに，野鳥保護や環境教育の効果を認めていることなどが明らかになった。後者からは，参加者が，いわゆる「マニア」層が中心となっていることを確認するとともに，ツアーの評価が，一般向けアンケートで重視される以上に，対象とした鳥を見られたかどうかに左右されることがわかった。今後，ツアー内容の充実や集客方法（宣伝方法）の検討が課題となる。
キーワード：エコツアー，カンムリウミスズメ，広島県，ブッポウソウ，野鳥観察

Abstract: An eco-tour designed to support the conservation works for wild birds is complemented in Hiroshima area. We clarified using two questionnaire surveys how the tour is evaluated. The survey for Hiroshima citizens shows that one forth of them express interest in the tour, instead of their blindness of the targeted birds. They accept a conservational value or an educational value of the tour. On the other hand, the survey for the tour participants shows that they are mainly the bird lovers, and that their evaluation of the tour are dependent on whether they could watch the targeted birds or not. It is necessary to improve tour programs and rethink about effective means of advertising, based on the results of these surveys.
Keywords: Bird-watching, Eco-tour, *Eurystomus orientalis*, Hiroshima Prefecture, *Synthliboramphus wumizusume*

Ⅰ．はじめに

自然保護が社会的な問題となるとき，現場を見ること，見せることは，とても重要な意味を持つ。自然保護団体等は，開発などに関連して問題が生じているところでは，問題状況をアピールし，広く一般の支持を獲得するために，しばしば現地見学会を開催する。開発反対運動のような政治的背景をもたない自然観察会は，全国各地で日常的に行われているが，問題になっている現場を見たいとか，そこの活動を応援したいという参加動機をもった人も少なからず存在する。浅野（1999）は，諫早干拓反対運動の一環として行われた全国の環境問題の現場をめぐるツアーを紹介したが，そこに紹介した民間の旅行会社によるツアーが成立する程度に需要はあるといえる。また，自然を観察するだけではなく，清掃活動や植林活動など環境保全の活動に参加するボランティア・ツアー，スタディ・ツアーも国内外を対象として行われている[1)]。

ところで，日本国内で野生生物保護と観光を意識的に結びつけた草分け的な活動として，1980年代に北海道の襟裳岬周辺で活動していたゼニガタアザラシの

1 広島大学大学院総合科学研究科；Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University
2 広島クマタカ生態研究会；Mountain Hawk Eagle Society of Hiroshima
3 広島大学大学院総合科学研究科大学院生；Graduate Student, Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

研究・保護グループが，その保護活動を進めるために，全国的自然保護団体と連携して，エコツーリズムの考え方に基づくスタディ・ツアーを企画・実施した例がある（日本自然保護協会，2002，p.197-198）。アザラシ保護と地元住民（漁民）が潤う観光利用が両立すれば，アザラシとその生息地保全に結びつけられるという自然保護団体側の提案を，地元が受け入れたもので，当初は全国の自然保護団体会員などに呼びかけてのスタディ・ツアーが行われた。アザラシ観察のために，全国から人が集まること，そしてその評判が高いことなどから，害獣としてしか見られていなかったアザラシの認識が改められ，今では，自然保護団体の手を離れてツアーが実施されるようになり，この地域のエコツアーメニューの一つとして定着するに至っている。

本稿では，これと同じように，広島県における野鳥保護活動に資することをめざして取り組まれている野鳥観察ツアー[2]を取り上げる。筆者等は，このツアーを企画・普及することに，当事者（飯田）および協力者として関わっており，本研究において，ツアーに関する市民のニーズを探ることを調査動機の一つとしている。また，アザラシ・ツアーをはじめ各地の事例が示唆するように，活動が定着するためには，地域住民との関わりをうまく築くことが重要である。そこで，本研究では，保護活動の現場となる地域との関わり方を意識しつつ，ツアー企画者の主眼である野鳥保護活動の推進と保護活動への理解促進につながるツアー実現のための課題を明らかにすることを目的とする。具体的には，2種類のアンケート調査結果に基づき，ツアーの意義や（地域との関わりを含む）ツアー内容の評価，需要の有無，想定される客層などを明らかにし，今後の課題を論じたい。

なお，筆者の一人である淺野は，ツアーの改善・充実につながる情報を得ることと並行して，ボランティアや寄付など，環境市民活動に参加・協力する市民の意識と属性を調べ，環境ボランティアを広範に獲得するための手法開発に関する研究を行っている[3]。今回の調査は，これら異なる2つの意図に基づいて行われたものである。ただし，本稿は，ツアーの改善・充実に向けての課題検討という観点から調査結果をまとめたものである。

対象とする見学ツアーは，三次市作木地区でのブッポウソウ[4]見学ツアーと，呉市倉橋島沖でのカンムリウミスズメ[5]見学ツアーである。これまで，共著者の飯田は，20年余にわたって，ブッポウソウの生態調査と巣箱かけなどの保護活動を行ってきた（飯田，1992，2001）。これまで，その活動費用を基本的に自弁してきたが，ブッポウソウの広島県内での生息数が回復してきたこと（飯田，2008）もあり，ブッポウソウへの理解を広く知らせることや，保護活動への理解・協力を広げるために，エコツーリズムの展開を模索することとした。そこで，2008年に広島大学大学院総合科学研究科の研究・教育プログラムの活動の一環として，モニターツアーを行った（淺野ほか，2008）。2009年には，瀬戸内海での生息が近年確認されたカンムリウミスズメの見学もメニューに加えた，参加者を一般に募集するツアーを実施することになった。

2008年の調査（淺野ほか，2008）では，ツアーには環境教育的な効果が十分認められるが，経済的な効果は限定的で，保護活動の必要経費の一部を補填する程度の利益は上げられるものの，地域への還元はほとんどないということを示した。また，ツアー実施に際して，対象となる生物への影響を最小限に抑えること，オーバーユースへの配慮が必要なこと，質の高いガイドや解説が望まれ，それを付加価値として参加費に反映させることなどの必要性も参加者との議論を通じて明らかになった。

2009年にツアー[6]を実際に行うことになり，前年度に引き続き，関連した調査を行うこととした。1つは，広島市民を対象としたWEBアンケート調査で，もう1つはツアー参加者を対象としたアンケート調査である。2008年の調査では，野鳥保護に関する講演会参加者とモニターツアー参加者を対象にしており，野鳥についての関心の高い層の意識を調べたので，今回は一般的な評価を知るために一般市民を対象とし，層の違いを見る。また，ツアー参加者は，前回のモニターと同様に，参加した上での評価を知るための対象であり，野鳥への関心の高い人である。

なお，ツアーは，それぞれの鳥を観察できる6月から9月にかけて，週末を中心に実施した[7]。完全予約制で，各回，参加者5，6人から20人程度で催行している。ブッポウソウ見学ツアーでは，渡り鳥であるブッポウソウの子育て期に限定されるので，梅雨時の6，7月に行い，参加費は9,000円で，広島市内からの交通費，食費，保険代等と保護活動への支援金1,000円程度が含まれている。内容は，ブッポウソウの見学[8]と解説，常清滝周辺での自然観察，畜産農家の見学，郷土料理の昼食などである。一方，カンムリウミスズメ見学ツアーでは，7～9月に参加費10,000円[9]で行われている。参加費には，漁船の借り上げ代や食費，保険代等の実費のほか，保護活動支援金が1,000円程度含まれている。内容は，参加者が漁船に分乗して沖に出て，鳥を探して観察することを軸に，途中の島な

みの見学（鹿島の段々畑の見学など），寄港後に郷土料理の昼食，簡単な講義，まちづくり関係者による現地案内などである。

Ⅱ．調査について

アンケート調査は，広島市民を対象とした，インターネットによるアンケート調査（以下，WEB アンケート調査）と，ツアー参加者を対象としたアンケート調査の 2 種類を行った。それぞれの概要は以下の通りである。

1．広島市民対象の WEB アンケート調査

事業化に向けての情報を得ることを目的にした 2008 年の調査では，ツアーの内容がマニアックなため，客層として野鳥観察や自然保護に関心のある人にしか訴求力がないのではないかと考え，「広島県の野鳥」に関する講演会参加者を対象として調査を行った。しかし一方で，一般市民の評価を知ることも重要であり，今回は，広島市民を対象とした WEB アンケート調査を行うことにした。

WEB アンケート調査は，市場調査などで現在よく使われており，個人情報保護の扱いが厳しくなる中，今後，増えていくと考えられている。回答者がインターネット利用者に限られるため，サンプルの代表性に問題があるが，選挙人名簿や住民基本台帳にアクセスできない状況で，かつ低予算で行える手段として，次善の策として評価できる。

広島市民に約 13,000 人のモニター（2009 年 4 月時点）をもつ株式会社インテージに調査を委託し，20 歳以上の男女を対象に 500 件以上回収するという条件で，683 件の回答を得た。回収率次第で回答者層が偏る郵送法とは違って，男女比や年齢比は想定したとおりの構成比で回収される。

表 1　対象とした鳥の認知度

n = 683：%

	前からよく知っていた	名前は聞いたことがある	知らない
ブッポウソウ	7.9	39.7	52.4
カンムリウミスズメ	0.9	15.2	83.9

2．ツアー参加者アンケート調査

実際に行われたツアー参加者を対象としたアンケート調査を行った。調査実施日は 2009 年 7 月 4 日，5 日（ブッポウソウの見学ツアー），8 月 8 日，9 日，22 日（カンムリウミスズメの見学ツアー）で，のべ 75 件の調査票を回収できた。ブッポウソウの見学ツアーの回答は 22 件，カンムリウミスズメの回答は 53 件であり，後者については 8 月 8 日実施回において，天候不順のために鳥が見られなかった。分析にあたって，このような条件の違いも考慮した。

Ⅲ．調査の結果と考察

1．広島市民対象の WEB アンケート調査

調査にあたって，まず，ブッポウソウとカンムリウミスズメとその保護活動について紹介し，参加費の一部を保護活動に充てるために，料金が実費プラス保護活動支援金（参加費を 10,000 円と想定しそのうちの 1,000 円が支援金）になっていることと，1,000 円分の支援金の使途[10] について説明を読んでもらった上で，回答してもらった。

回答数は 683 通で，男性が 50.7%，女性が 49.3%，20 代 が 21.3 %，30 代 19.9 %，40 代 22.1 %，50 代 20.6%，60 歳以上 16.1%と，性別と年齢層について，それぞれが同程度の割合になるように回答を集めた。職業は，会社員・公務員が 42.5%ともっとも多く，主婦・主夫が 20.6%，パート・アルバイトが 13.2%となった。世帯収入は，250 万円未満が 16.3%，500 万円未満が 34.8%，750 万円未満が 23.3%，それ以上が 16.9%であった（8.7%が無回答）。

表 1 に示したとおり，ブッポウソウもカンムリウミスズメも認知度は低い。ブッポウソウについては，広島県内での繁殖が新聞やテレビなどで報じられる機会が以前からあるので，最近瀬戸内海にいることが確認されたばかりのカンムリウミスズメよりは知られている。認知度の低さを反映していると思われるが，今回想定したツアーへの参加意向をたずねた設問（表 2）では，参加したいと答えた人は，いずれの場合も 7%弱と少なかった。2008 年に行った講演会参加者アンケートでは，7 割以上の人がブッポウソウの名前を知っており，1/4 がツアーに是非参加したいと回答し

表 2　野鳥保護活動支援ツアーへの参加意向

n = 683：%

	是非参加したい	参加したい	参加するかもしれない	あまり参加したくない	参加したくない	絶対に参加しない	わからない
「ブッポウソウ」ツアー	1.6	4.2	22	27.2	16.1	4.7	24.2
「カンムリウミスズメ」ツアー	1.5	4.2	21.5	27.7	16.7	4.4	24

ており（参加したくないは2.5％），結果が大きく異なる。当初予想したとおりに，このツアーは野鳥に関心のある人にとって訴求力のある企画で，そうでない人にはあまり魅力を感じてもらえないということであろう。とはいえ，「参加するかもしれない」という回答まで含めれば，今回の調査でも約3割に受け入れられる余地があることが確認できた。

このツアーの評価を尋ね，その結果を得点化したものを表3に示す。5点満点で点数が高いほど評価が高い。4点を超えているものは，「地域の自然を見直すきっかけになる」，「自然への理解が深まる」，「野鳥保護につながる可能性がある」の3項目で，ついで「子どものよい経験になる」も高くなった。環境教育的な面での効果が高く評価され，保護にも役立つと考えられている。ただし，保護に役立つことより，教育的な側面での評価の方が高いことは注目すべきである。ツアーに参加することが保護活動につながるという理屈が，ツアーに参加することが自然の学びになるという理屈より弱いと考えられるからである。

ツアーで重視する内容（表4）を尋ね，同様に得点化したところ，自然環境や保護活動の解説やガイドと，巣箱掛けや生態調査などの現地での保護活動体験の得点が高いことがわかった。このツアーの場合，保護活動についての学びを充実させ，保護活動の体験までをプログラム化することが，ツアーの質を高め，需要を開拓していく上で大切であると確認できる。2008年のモニターツアーでも，専門家による質の高い解説やガイドの提供が，野鳥保護を意識したツアーに必要と指摘され，保護活動に自分も関わりたいという要望が表明されたこととも合致する。学習や保護活動体験についで，生きもの探しや自然体験などの活動と，郷土料理などの食事が，重視する事項としてあがり，野鳥保護一辺倒ではないレクリエーション的な側面も，堅苦しくない観察ツアーとして求められる。また，今回の回答で，目当ての野鳥を必ず見られることは，3.42点ながら，順位としては高くなかった。想定上の質問ではこのような結果になったが，後述する実際のツアー参加者調査では，鳥が見られたかどうかが，明らかにツアーの評価を左右したので留意する必要がある。

結果を表で示していないが，適正と思う活動支援金額について，参加料金に含まれる1,000円に加えて，いくらまでなら寄付できるかという形で尋ねている。500～1,000円（始めの1,000円をあわせると1,500～2,000円）が43.1％と最も多く，500円未満（1,500円未満）が13.2％，1,000～2,000円（2,000～3,000円）が12.7％，2,000～3,000円（3,000～4,000円）が11.3％となった。平均的にみると活動支援に1,000～3,000円程度は出してよいと考えられている。これはツアー参加者の結果や，2008年の調査結果とも重なっており，野鳥が好きかどうか，保護活動に関心があるかどうかと，あまり関係なく，支援してよい金額は決まるといえる。

ツアー参加者ではなく，保護活動にボランティア・スタッフとして関わる意向について尋ねたところ，1割程度が参加したい，3割が参加するかもしれないと回答した。上記の支援金額や，スタッフとしての参加意向を示す層について，回答者属性との関係については別稿で改めて論じるつもりなので，ここでは回答結果を示すのみにとどめる。

ところで，このような野鳥保護活動にかかる費用を本来どのように調達すべきかについて尋ねたところ，表5の結果を得た。2008年調査でも同じ質問をして

表3　野鳥保護活動支援ツアーの評価

n＝204

評価項目	得点
面白そう・楽しそう	3.86
子供のよい経験になる	3.95
野鳥保護に役立つ可能性がある	4.11
野鳥の生息を脅かすおそれがある	2.94
自然への理解を深める	4.26
地域の自然を見直すきっかけになる	4.27
仲間が広がる	3.65
自分の居場所が見つけられる	2.68
地域住民との交流につながる	3.36
ボランティアへの関心が高まる	3.53
地域の活性化につながる	3.38
社会的意義がある	3.66

注1：ツアーに参加するかもしれないと答えた層を対象にしたため，サンプルは204になっている。
注2：得点は「そうだと思う」を5点，「まあそうだと思う」を4点，「どちらでもない」を3点，「あまりそのように思わない」を2点，「そのように思わない」を1点として集計した。

表4　ツアーで重視する内容

n＝204

ツアーのメニュー	得点
目当ての野鳥を必ず見られること	3.42
自然環境や保護活動の解説・ガイド	3.92
地域住民との交流・意見交換	3.26
生きもの探しや自然体験などの活動	3.51
調査などの現地での保護活動体験	3.81
農漁業体験等のオプションメニュー	3.23
郷土料理・名物料理等の食事	3.49

注1：ツアーに参加するかもしれないと答えた層を対象にしたため，サンプルは204になっている。
注2：得点は「とても重視する」を5点，「まあ重視する」を4点，「どちらでもない」を3点，「あまり重視しない」を2点，「重視しない」を1点として集計した。

いるので，両者を並べて表示した。両者共通して，行政の助成金・補助金で行うべきという意見が最も高い順位を与えられ，関係者の手弁当でやるべきとは考えられていない。大きく異なるのは，今回のツアーのような保護団体が事業を行い，その収益を活動に充てることの評価であった。市民対象の場合は，この方法の優先順位が低いのに対して，野鳥への関心が高く，自分も高い参加意向をもつ回答者を対象とした2008年調査の場合には，これが行政の助成金・補助金に次ぐ高順位であった。一般市民には，ツアーによる事業収益があまり集まらない（事業としての芽がない）という印象をもたれるからかもしれない。

今後の企画を練る上で，どこにどのような宣伝をするのかは重要であり，この種の行事に参加する場合に，どのようなメディアからの情報を重視するのかについて尋ねてみた（表6）。WEB調査だったこともあり，インターネットのWEBサイトなどからの情報がもっとも多く，ついで，テレビ，新聞，クチコミ，ポスター・チラシ類，タウン情報誌であった。

2．ツアー参加者アンケート調査

参加者を対象としたアンケートは，各回の見学会終了間際に，回答の時間を設けて，原則として全員に記入してもらった。75件の回答のうち，男性49.3％，女性50.7％とほぼ半々になったが，年齢層は，10代・20代が9.3％，30代が2.7％，40代が16.0％，50代が12.0％，60歳以上が50.7％と，中高年が大半を占めた。参加者は，広島県内がほとんどで，大阪府や兵庫県からの参加（6名）もあった。県内では8市3町からの参加があり，団体参加のあった三原市16名のほか，広島市13名，東広島市12名，呉市7名，廿日市市6名と分散した。三原市の16名は公民館の講座としての参加(この日は雨天で鳥が見られなかった)であるが，その他では，友人・知人や家族，個人という参加形態で，ほぼ半分がクチコミ情報に基づいて参加（46.6％）を決めていた。

ツアーに参加した動機は，表7に示したとおりで，ブッポウソウやカンムリウミスズメを見てみたかったことが73.3％，野鳥観察が好きというのが61.3％，自然保護に関心があるのが40.0％であった。対象となる鳥を見てみたいのは当然として，自然保護に関心があるとか，保護活動の現場を見てみたいという理由をあげる人も多い。割合はさほど高くなかったが，特徴的な回答として，鳥の写真を撮りたかった（17.3％）というのがある。この設問は複数回答なので，複数の選択肢をマークする回答者が多くなる中，この選択肢を選ぶ場合は，これのみを選ぶ回答が目立った。実際にツアーに同行して，鳥の写真撮影を趣味とする人の参加が多いと感じられた。

また，参加者は，これまでに自然観察会などに参加した経験がある場合が多く，今回が初めての観察会という人は6人（観察会を開催した地元の人）しかいなかった。これまでに経験した観察会としては，野鳥観察会が73.9％，植物観察会47.8％が多く，天体観察

表5　野鳥保護活動として適切と思う資金源

n＝683

資　金　源	2009年調査	2008年調査
行政の助成金・補助金	4.43	4.46
財団等の助成金	4.29	3.69
保護団体をつくって会費	3.53	3.50
保護基金をつくって寄付	4.11	3.98
ツアー等の環境事業収入	3.04	4.13
メンバーの手弁当	1.59	1.96

注1：2009年は広島市民一般を対象とし，2008年は野鳥の講演会に参加した層を対象としている。
注2：適当と思う資金源について1～6位までの順位をつけてもらった回答をもとに，1位6点，2位5点と点数化して集計した。

表6　行政や市民団体企画の行事等に参加する場合の情報源

n＝683

メディア	得点
テレビ	2.49
ラジオ	1.16
新聞	2.28
雑誌・書籍	1.78
ポスター・チラシ・ダイレクトメール類	1.88
行政の広報紙	2.08
タウン情報誌	1.86
インターネットのWEBサイトなど	2.51
メーリングリストなど	1.41
講演会やイベント	1.11
知人・友人・家族の話（口コミ）	1.94
自治会の回覧板など	1.52

注：得点は「よく活用する」を4点，「やや活用する」を3点，「どちらでもない」を2点，「あまり活用しない」を1点，「活用しない」を0点として集計した。

表7　ツアーへの参加動機

n＝75：複数回答

動　　機	割合％
野鳥観察が好き	61.3
対象の鳥を見てみたかった	73.3
自然保護に関心がある	40.0
保護活動の現場を見てみたかった	24.0
広島の自然に関心がある	25.3
鳥の写真を撮りたかった	17.3
誘われたから	17.3
飯田さんが行う観察会だから	14.7
まちづくりの活動に関心がある	14.7

会も 23.2％と 3 番目につけている。ジャンルを問わず，いろいろな観察会に参加経験のある人が集まってきている。また，自然保護活動への参加経験者も多く，半分以上の人が，里山活動や海岸清掃，野生生物の保護活動などへの参加経験をもっていた。野鳥の写真撮影愛好仲間の連絡で知ったという参加者もおり，このような企画に日頃から強い関心を持っている人たちが，噂を聞きつけて参加したケースが多かったと思われる。参加者の住所が偏らなかったのも，これが一因と考えられる。

ツアーの評価と適当と思う活動支援金額について，ブッポウソウ・ツアー参加者，カンムリウミスズメ参加者（鳥を見られた人），同（見られなかった人）の 3 グループごとに，得点化して示したものが表 8，得点化する前のデータをクロス集計して，グループ間の違いに統計的に意味があるか，独立性の検定を行った結果を示したものが表 9 である。

全体的な傾向として，案内者の解説の評価と，鳥を見られたことの評価が高く，参加者間や地元住民との交流の評価が相対的に低くなった。解説・案内の大切さを再確認するとともに，鳥を見ることは，それだけで満足を与える（見てがっかりすることはない）ことが確認できる。

ブッポウソウであれ，カンムリウミスズメであれ，見ることができた場合には，内容の評価は高く，見られなかった場合には，鳥が見られたかどうかの評価のみならず，総合評価や，野鳥観察以外の活動のように直接関係ない評価項目でも，有意に低い評価になった。WEB アンケート調査で示された建前的な優先順位と違い，目当ての鳥を見られるかどうかが，現実問題として，とても重要だということがわかる。

ブッポウソウとカンムリウミスズメ（鳥を見られた）の差は，野鳥観察以外の活動，他の参加者との交流，地元の人との交流に現れ，ブッポウソウ見学の評価が高かった。これは実施方法によると思われ，ブッポウソウ見学の場合は，見学場所・立ち寄り場所が決まっていて，1 つのグループでゆっくり歩きながら見学するのに対し，カンムリウミスズメの場合は，漁船に分乗しており，甲板を歩き回れず，エンジン音が大きく会話しにくい。そのため，解説の詳しい船とそうでない船があったり，乗船者間のコミュニケーションがあまりできなかったりする。評価はこの状況を端的に表している。解説の仕方や参加者間のコミュニケーションの仕方は，ブッポウソウの場合も含めて改善の余地がある。

参加人数と活動時間については，おおむね妥当と評

表 8　ツアーの評価及び適当と思う活動支援金額

	回答者数	内容の評価（得点）						人数と時間（得点）		活動支援金額（人）：最右列は得点						
	（人）	総合的満足度	案内者の説明	野鳥を観察したこと	野鳥観察以外の活動	他の参加者との交流	地元の人との交流	参加者の人数	活動時間	5 百円未満	1 千円未満	2 千円未満	3 千円未満	5 千円未満	5 千円以上	得点
全体計	75	4.42	4.51	4.32	4.03	3.90	3.91	3.04	3.12	2	28	33	5	2	2	2.76
ブッポウソウツアー	22	4.86	4.81	4.91	4.68	4.50	4.50	2.77	3.05	0	6	13	2	0	1	2.95
カンムリウミスズメツアー	53	4.24	4.39	4.04	3.70	3.60	3.63	3.16	3.15	2	22	20	3	2	1	2.68
鳥を見られた	34	4.88	4.68	4.85	4.03	3.77	3.84	3.03	3.15	0	13	15	2	1	1	2.81
見られなかった	19	2.94	3.73	2.14	2.92	3.21	3.20	3.44	3.14	2	9	5	1	1	0	2.44

注 1：内容の評価について，「とてもよい」を 5 点，「まあよい」を 4 点，「ふつう」を 3 点，「あまりよくない」を 2 点，「全くよくない」を 1 点として集計した。評価の高いものが高得点になる。
注 2：参加人数と活動時間の評価については，「とても多い（長い）」を 5 点，「やや多い（長い）」を 4 点，「ちょうどよい」を 3 点，「やや少ない（短い）」を 2 点，「少ない（短い）」を 1 点とした。評価がよいものは 3 点でそこから離れるほど評価が下がる。
注 3：協力金額の得点は，「5 百円未満」を 1 点，「1 千円未満」を 2 点，以下同じく，「5 千円以上」を 6 点として集計した。点数が高いほど，支払ってもよい協力金額が高くなることを示す。

表 9　ツアーの評価等とツアー 3 区分間の関係

＊＊は 1％有意，＊は 5％有意，空欄は 2 項目間の関連は有意でないを示す。

	内容の評価						人数と時間		活動支援金額
	総合的満足度	案内者の説明	野鳥を観察したこと	野鳥観察以外の活動	他の参加者との交流	地元の人との交流	参加者の人数	活動時間	
ブッポウソウとカンムリウミスズメ（鳥を見られた）のクロス集計				＊＊	＊＊	＊			
カンムリウミスズメを見られた場合と見られなかった場合のクロス集計	＊＊	＊	＊＊	＊＊	＊	＊	＊		

注：表側の 2 項目（上の列ではブッポウソウとカンムリウミスズメ（鳥が見られた）の別）と内容評価等の各項目間のクロス集計を行い，出来上がった 18 個のクロス集計表について独立性の検定を行った結果を示している。

価された。

参加費に上乗せする活動支援金の許容金額について，500 円以上 2,000 円未満の範囲に約 8 割の回答がおさまっている。この結果は，2008 年の調査，今回の WEB アンケート調査と比べて，相対的に低い結果である。これは，この対象者のみが，実際に参加費を満額支払っており，トータルでの支出金額を念頭においての判断と考えられる。それでも 1,000～2,000 円が最も多く選択されていることは，1,000～2,000 円位が妥当な水準と考えてよいであろう。ブッポウソウとカンムリウミスズメの違い，鳥を見られたか，見られなかったかの違いは，得点として差があるようにみえるが，元のデータのクロス集計結果では有意な差ではなかった。寄付してよいと思う金額は，野鳥への関心の有無によらないとした WEB アンケート調査の場合と同じように，体験内容の差にあまり影響を受けず，個人的な金銭感覚によっていると考えられる。

Ⅳ．おわりに

最後に，野鳥保護活動支援を目的とした見学ツアーの今後の課題について述べてみたい。今後の展開として，鳥の知名度が一般的に低い一方，野鳥愛好家には魅力を感じさせ，実際に鳥を見ることの満足度が高いことをふまえれば，まずは野鳥に関心を持つ層をターゲットとして参加者を募り，その人脈を期待して，集客を増やしていくことが無難である。その際，集客圏を広島県内のような狭い範囲ではなく，京阪神や首都圏など，野鳥観察や写真撮影のために全国を回る趣味人が多く住む地域を想定すべきである。愛好家の集客がある程度定着し，外からの目で評価されるようになれば，特に鳥好きというわけでない人の来訪も期待できる。そのような例は，蕪栗沼や伊豆沼で冬の渡り鳥を見学する観光客が増えた例や，襟裳岬のアザラシ見学がツアーメニューになる例，屋久島のウミガメ産卵地が年々観光客を増やしているような例からもわかるように，あり得ない話ではない。

ただし，そのような展開を期待するにしても，ツアーのプログラムや実施方法等について検討すべき点は多い。第一に，一般のアンケートで最も重視され，参加者からもコメントの多い，解説や案内の充実は，最優先事項であろう。現状の参加者評価は高いが，鳥が見られなかった場合などに，参加者の満足を満たすには解説・案内の果たす役割が大きい。アンケートの自由記述でも，1 時間程度の講座を行ってほしいとか，旅行会社のツアーではなく専門家による案内である点がよいとかの，意見が書かれており，解説を聞くだけでも満足できる「学び」のツアーを意識することが大切である。その際，野鳥の解説だけではなく，保護活動についての解説や，保護活動を実体験することへのニーズがあるので，活動に参加する人，活動をサポートしてくれる人を獲得する場として，ツアーを設計することも考えられる。

第二に，野鳥観察以外のプログラムを充実することも課題である。現状では，オプション部分が未熟なことは否めない。参加者による内容評価でも高い評価は得られていない。地域との関わりあるメニューをいかに創り出すかが，観察会を行っている地域の保護活動や観察ツアーへの前向きな姿勢を引き出す上で不可欠である。ただし，今回のように参加者が野鳥愛好家を中心とする場合，その種のことに関心が薄いこともあるので，中途半端な内容では逆効果になってしまう懸念もある。

当面は愛好家層を意識する展開でよいと思われるが，ツアーの認知度が高まったら，その状況から脱皮し，より一般的な参加者が集まるようにしていくことが望まれる。一度見れば満足してしまうことも考えられ（活動参加型ツアーの性格を強め，参加者がスタッフ化していくことになれば別だが），愛好家層だけを狙っていては活動が続かないし，野鳥や保護活動への理解を深めるという啓発効果を考えれば，よく知らない人にどれだけ伝えていくのかこそが重要といえる。また，地域との関わりを強化することも課題である。野鳥が地域で保護されるためには，保護活動に関わる人をそもそも増やさなければならず，地域住民が解説者や案内者を担うことも期待される。そのためには，保護活動と観察会などをセットにして，その活用を積極的に考え，それが地域にとって利益になるしくみを生み出すことが必要である。

なお，本稿では，広島での本ツアーの内容や進め方を改善・充実するための課題を見出すことを目的としたが，今後研究を進めるにあたって，このような草の根の環境事業を企画し普及するための議論や汎用性のあるノウハウの開発につなげていくことも望まれる。この点はこれからの課題である。

【謝辞】

観察ツアーを実施するに際し，三次市作木町，ならびに呉市倉橋町の関係者の皆さまに大変お世話になりました。感謝申し上げます。なお，WEB アンケート調査には，平成 19-21 年度科学研究費補助金（萌芽研究「機会論に基づくマーケティングを応用した環境ボランティア獲得の為の情報システム開発」（代表：

前田恭伸）を使用した。また，現地調査は，大学院教育改革支援プログラム「文理融合型リサーチマネージャー養成プログラム」の一環として行った。

【注】

1）たとえば，中国の乾燥地域での植林ツアーや，東南アジアのマングローブの植林ツアーのようなものや，国内で大手旅行会社が社会貢献活動として行う清掃活動ツアー（国内）などがあり，インターネットなどを通じて，いろいろな取り組み情報を得ることができる。

2）対象とする野鳥観察ツアーは，通常の野鳥観察会と若干性格が異なる。野鳥観察会（探鳥会）は全国各地で行われている。日本野鳥の会によると，観察会は年間約 3 千回，のべ約 9 万人の参加がある（http://www.wbsj.org/shibu/tancho/index.html．2010 年 10 月 31 日閲覧）。広島県では，日本野鳥の会広島県支部が開催した観察会は 73 回あり，1,294 人の参加があった（平成 21 年度の同支部年報による）。これらの観察会は，鳥の観察が行事のほとんどを占め，費用も資料代や保険代等の実費を集める程度で，観光ツアーではない。今回対象とする事例も，基本的にはこれらとあまり変わらないが，参加者に保護活動への協力金込みの参加費を求め，実費以上の経済的な見返りを期待している。さらに将来的にはツアーの運営を地元の住民組織などに移管することも意識しており，観察会をメインメニューとした野鳥保護活動の観光プログラム化を意図している。このような取り組みは他にもあるが，その全体像は不明で量的に把握することは困難である。なお，野鳥観察は，旅行会社による営利の観光ツアーとしても行われている。日本野鳥の会の機関誌（2010 年）に広告掲載されたものをピックアップしてみると，4 社からの広告があり，専門旅行社とうたう S 社の場合，海外ツアーを年間 58 回企画しており，別の W 社の場合，国内日帰りから海外ツアーまで年間 150 回（開催率 80%）を企画していると宣伝している。今回対象としたツアーは，通常の観察会と民間の観光ツアーの中間的な性格をもつものである。

3）淺野敏久ほか（2010）として結果を公表予定である。

4）ブッポウソウは，嘴と足が赤いほかは，全身青緑がかった色で，ハトよりやや小型の鳥である。ユーラシア大陸東部に分布し，4 月下旬頃に日本に渡ってきて繁殖し，冬に南方に渡る。絶滅危惧 IB 類（EN）とされ，全国的に減少傾向にあるが，広島県や岡山県では巣箱による保護で繁殖個体数が回復している。結果として広島県への飛来数が全国でもっとも多く，その密度が特に高いのが今回の対象地である。

5）カンムリウミスズメは，日本の離島で繁殖し，冬は洋上で過ごす。寒帯に多いウミスズメ科の中で唯一温帯に適応した種類で，ほぼ日本固有といえる。体長は 25cm ほどで，白黒のコントラストが美しい。絶滅危惧Ⅱ類（VU）である。これまで瀬戸内海には生息しないと考えられていたが，2007 年に瀬戸内海西部での生息が確認された。今回の対象地の倉橋島沖はよく観察でき，調査が行われている場所である。

6）今回の企画を便宜上「ツアー」と称するが，実際には参加者が交通費・食費等の実費を支払って参加する観察会であり，営利の旅行業ではない。ただし，参加者に保護活動支援のための寄付もあわせて求めているので，参加者は結果的に実費以上を支払っている。

7）2010 年は，より長期間の設定がされている。ブッポウソウは時期が限られるが，カンムリウミスズメについては，1, 3, 5, 7, 8, 9, 11, 12 月の週末・祝日に，予約があれば実施することになっている（http://www3.ocn.ne.jp/~kumataka/umisuzumetour.html　2010 年 6 月 23 日閲覧）。

8）鳥が営巣している巣箱を事前に調べてあるので，見学者は現地に着けば，ほぼ確実にブッポウソウを見ることができる。この点，海上で鳥を探すために，見られるとは限らないカンムリウミスズメの場合とは異なる。

9）出航する漁船数によって料金が変わる。参加人数次第の料金設定になっている。

10）1,000 円の活動支援金で，巣箱 0.3 個分の作成費，あるいは海上調査 0.05 回分の費用がまかなわれる。

【文献】

淺野敏久（1999）：自然保護運動にとってのエコツーリズム，日本研究，13，1-19.

淺野敏久・朝格吉楽図・光武昌作・西原元基・竹本美紀（2008）：野鳥保護活動支援を目的としたエコツアーの実現可能性，環境科学研究，3，17-39.

淺野敏久・森保文・前田恭伸・犬塚裕雅・伊藝直哉（2010）：環境保全活動への参加意識－野鳥保護活動支援見学会を事例として－，環境科学研究，5，印刷中.

飯田知彦（1992）：電柱を営巣場所にするブッポウソウ *Eurystomus orientalis* の繁殖分布，Strix，11，99-108.

飯田知彦（2001）：人口構造物への巣箱架設によるブッポウソウの保護増殖策，日本鳥類学会誌，50，43-45.

飯田知彦（2008）：広島県におけるブッポウソウの個体群保全の成功例．日本生態学会全国大会 ESJ55 講演要旨一般講演（口頭発表）A2-10, 203.

日本自然保護協会（2002）：『自然保護 NGO 半世紀の歩み（下）』平凡社.

（2010 年 8 月 31 日受付）
（2010 年 11 月 19 日受理）